

2006年度（後期） 学生による授業評価アンケート調査
「アンケート結果に応じて」

所属部局	人文学部		氏名	田中伸司
講義番号	1820A266		担当科目名	哲学各論Ⅱ
開講曜日	水曜日	7・8時限	○ 専門科目 ・ 全学教育科目	
授業回数	14回	休講回数	0回	補講回数 0回
受講登録者数	30人	成績評価対象者数	30人	授業放棄者数 4人
成績評価に際し注意した事項 成績評価は出席状況を基本条件として試験結果によった。相対評価 (S:10%、A:30%、B:30%、C:30%)を心がけたが、実際にはやや厳しい評価となった。				
報告内容				
<p>1. 「偏差値CSグラフ」および「『授業カルテ』の読み方」によると、Q6およびQ12に問題がある（「学生が重要であると考えているが、満足度は低い」との診断結果であった。それぞれについても少し具体的に見ていこう。</p> <p>Q6「授業の進度が適切である」については、平均値7.2満足率68.0ではあるものの、評価6の学生が5名、評価5、評価4、評価3の学生がそれぞれ1名いた。他方、評価9の学生は6名、評価8の学生は7名、評価7の学生は4名であった。</p> <p>Q12「授業の難易度は適切である」については、平均値6.6満足率60.0であり、評価6のおよび評価5の学生が各3名、評価4の学生が2名、評価3および評価1の学生が各1名いた。他方、評価9の学生は5名、評価8の学生は4名、評価7の学生は6名であった。</p> <p>これら二つの項目はほぼ相関しているように思われる。すなわち、進度が適切であると解答した学生は難易度も適当であり、進度を適切ではないと思う学生は難易度を適当ではないと思ったであろうと、推測できる。これらの結果から、本授業は、よく理解した学生と理解に問題を抱えた学生に分化していたと考えられる。専門科目として難易度は高めに設定していたとはいえ、後者の学生への指導という点で課題が明確になった。</p> <p>2. 「偏差値CSグラフ」および「『授業カルテ』の読み方」によると、Q3およびQ13については「今後もそのような評価が得られるよう」努力するように（「学生が重要であると考え、その満足度も高い」との診断結果であった。それぞれについて簡単に見ていこう。</p> <p>Q3「教材（教科書等）の使い方が適切である」については、平均値7.6満足率88.0であり、受講生はおおむね満足しているという結果が得られた。本授業においては、多くの教材を使用したため、もしかすると消化不良を起こすのではないかと恐れたが、杞憂であった。</p> <p>Q13「授業を受けて知識・技術が身についた」については平均値7.8満足率84.0であり、「偏差値CSグラフ」によるとこの項目がもっとも「重要度偏差値」が高いものであった(0.9092)。前述の、Q6およびQ12に示された状況を考えると、受講生の多くが何かを掴んだという実感を得られたことはとても良かった。</p>				